

地域と時間をつなぐ 「よそ者」の役割を考えるための10冊

「内や外」「過去と現在」をつなぎ、地域やコミュニティのより良い形を考えるため、「よそ者」の役割を見直すことは何らかの手がかりになるのではないのでしょうか。今号で紹介した事例の理解をより深める助けとなる10冊を選びました。



6 『民主主義を学習する』

—教育・生涯学習・シティズンシップ—

著者は世界的な注目を集めるオランダの教育哲学者。公共的な事柄に積極的にコミットし、異なる意見を持つ他者と共に社会を形成する「政治的主体」を育むためのシティズンシップ教育のあり方が説かれる。コミュニティを築くうえで欠かせない、市民性のあり方を見直す一冊となる。

ガート・ビースター=著
上野正道、藤井佳世、中村(新井)清二=訳
勁草書房／2014年



7 『関係人口をつくる』

—定住でも交流でもないローカルイノベーション—

「過疎」という言葉の発祥地とされる島根県。自らをローカルジャーナリストと名乗る筆者が、自身の出身地でもある島根県に向き合うなかで、「関係人口」という新たな潮流に光を見出した経緯が丁寧に綴られている。関係案内所「しまコトアカデミー」のあり方や、関わるキーパーソンたちの役割など分かりやすく解説される。

田中輝美=著
木楽舎／2017年



8 『新移民時代』

—外国人労働者と共生する社会へ—

アジアの玄関口である九州のブロック紙・西日本新聞で、2016年12月から展開されたキャンペーン報道「新移民時代」が一冊に。すでに立派な移民「当事国」となったこの国で暮らす外国人の実像や、彼らなしでは成り立たない日本社会の現実をあぶりだし、さらなる議論の深化と具体的方策の道筋を示す。

西日本新聞社=編
明石書店／2017年



9 『異和共生のまちづくり』

—暮らしても、遊んでも、働いても面白いまちへ再変革—

今号で紹介した「ヨリドコ 大正メイキン」にも関わる名物区長(元大正区・現港区)による著書。大阪に明治期以降根付いた沖繩文化と元からある大阪文化との異文化対立や、新興勢力と既存勢力の軋轢など、さまざまな対立構造こそが活性化を阻害しているとし、異和共生を唱え問題を解消していく。地元への熱い想いも伝わる良著。

筋原章博=著
セルバ出版／2017年



10 『[増補] 無縁・公界・楽』

—日本中世の自由と平和—

日本史における新たな中世像を構築するとともに、民俗学・文化人類学が中心だった「異人論」研究に、歴史学からの視座を提供した決定的一冊。あえて既成の社会集団と縁を切った漂泊民、内と外の境界にあって行き場のない人びとのアジュールとなった自治都市・縁切寺など、本書で発見されたテーマは今も新鮮な驚きに満ちている。

網野善彦=著
平凡社ライブラリー／1996年



1 『コミュニティをエンパワメントするには何が必要か』

—行政との権力・公共性の共有—

世界各地の事例を取り上げながら、コミュニティをめぐる問題を考察。そのうえで著者は、コミュニティの可能性は社会的包摂にあると見定め、その実現に向けた、国家や行政と共存するコミュニティを構築するための道程を示している。

マリリン・テイラー=著
牧里毎治、金川幸司=監訳
ミネルヴァ書房／2017年



2 『異人論とは何か』

—ストレンジャーの時代を生きる—

日本の思想界に“異人旋風”が吹いて30年あまり。かつての理論的蓄積を土台に、若手研究者が民俗学、歴史学、文学、社会学、心理学、メディア論、経済学といった幅広い視点から異人論を掘り下げる一冊。異人=よそ者を脱構築的に問い直す各々の手際は、この分野の豊かな到達と尽きせぬアクチュアリティを物語る。

山泰幸、小松和彦=編著
ミネルヴァ書房／2015年



3 『多主語的なアジア』

(杉浦康平デザインの言葉)

日本のグラフィックデザイン界を牽引してきた杉浦康平の執筆、対談などをまとめたシリーズの第1弾。今号でも語られている「多主語的」というキーワードをアジア各国の図像から読み解き、その意味を提示している。西欧的な価値観のオルタナティブとしてのアジアー日本の美意識を考えるうえで、著者の言葉は大きな指針となる。

杉浦康平=著
工作舎／2010年



4 『コンテンツが拓く地域の可能性』

—コンテンツ製作者・地域社会・ファンの三方良しをかなえるアニメ聖地巡礼—

著者によれば、アニメ聖地巡礼による「三方良し」の実現は、意外に難しいという。その課題解決の視座を当事者それぞれの立場から描写。よそ者であるファンと地域との間で、関係人口という絆が育っていくプロセスを、理論的な背景とドキュメンタルな事例研究を通じて立体的に構成する。

大谷尚之、松本淳、山村高淑=著
同文館出版／2018年



5 『[新版] アメリカ大都市の死と生』

1950年代のアメリカの建築、街区、都市開発の事例を、市民活動家でもあった著者ならではの内的視点で考察しつつ、近代都市計画への批判を展開。都市とは明らかに複雑に結びついている有機体であると説き、その多様性の魅力に言及する理論はそれまでになく、都市論の古典とされている。都市の魅力の源泉である賑わいとコミュニティの役割を明確に示しており、現代にも十分通じる。

ジェイン・ジェイコブズ=著 山形浩生=訳
鹿島出版会／2010年

